

園長だより NO61

表現について

緊急事態宣言が発令され、家にこもり過ごす時間が増えたという。町から元気な子ども達の声を聞く機会がすくなってきた。子どもたちがこの社会の中で「僕は 私は生きているんだー」と表現できる場所がコロナ渦ではどんと削がれていく。

保育園の園目標(望む子ども像)の一つに「自分の考えを表現できる子」が掲げられている。考えと限定しているが本来は自分を表現できるという意味で私はとらえている。

表現とは単に歌を歌う、絵を描くというものではない。表に現したくなるものが自分の内に存在し、現したくなるものが様々な手法を使い表に出てくるものかと思っている。

子ども達は育ちと共に様々なものに会う、出来事にも会う、人との出会いもある。

心動かされ、感情は育ち、知識や技術もそれなりに獲得するこの乳幼児期の体験こそが、それぞれの表現のベースになり大人になっても持ち合わせていくものなのではないでしょうか。

幼少期は心動かされる経験が沢山(表現の源)

私事になりますが小学校の頃の記憶はどんどん薄れる一方ですが、その反面いつまでも覚えている事もあるものです。

小学校1年生の頃です。もう半世紀以上の昔話です。

仲良しの友達ができ、名前はかっちゃん(仮名)

かっちゃんは私と違って品があった、育ちもいい、ある時、かっちゃんの家数名の友達と遊びに行くことになった。かっちゃんは勉強もできた、足も速い、細く小さくきゃしゃな子であった

かっちゃんの髪型は7：3分け、お父さんのポマード(油の整髪料)



を使いびしっと整えていた。毎日、七五三かと思わせるぐらいおしゃれでいた。ちびまる子ちゃんにでてくる花輪くんのようないでたちで小学校1年生とは思えないぐらいキザだった。かっちゃんの家は長方形の家であった。日本家屋が街並みに並んでいるなかで一際、目立っていた。

些細なことでも心が揺れ動く

かっちゃんの家に入る、通されたのが応接間という部屋、大きな革のソファがあり天井には豪華なシャンデリアがあった。壁には大きな絵画が飾られていた。3人のおばさんが畑仕事をしている絵であった。今思えばその絵はフランスの絵画の落穂拾いの複製品ではないかと、とにかく大きい絵であった。

しばらくするとかっちゃんのお母さんがいい匂いのするものを運んできた、はじめて香るこの匂いにみんなで高揚した、出されたものはクッキー、お母さんは焼き菓子と言っていた。そして茶色いお茶がだされた、「これは紅茶よ」と言われた。クッキーも紅茶も初めて食した。こんなものを毎日、かっちゃんは食べているのかと思うと羨ましい言葉しか思い浮かばなかった。

好奇心旺盛な子ども達はどこでつくれ、どんな人がつくるのか、何を使ってできているのか、

いろんな事を考え、思うことをいろいろ話した記憶がある。

ある子は心地良いソファに魅了され、おいしいクッキーに魅了され、私はクッキーにも魅了されたが壁に飾られていた大きな絵画に興味を持った。子どもながらに「今にも泣き出しそうな色づかい」に魅了された。子どもの頃は言葉の語彙も少ないのか「泣き出しそうな色」と表現した当時の私に会ってみたい、どんな思いを持ってその絵画をみていた自分がいたのだろうか

その空間の数時間はまさに夢をみているような時間であった「みて、きいて、感じて、味わい嗅いで」すべての五感をフルに使った。

その後は庭で遊んだ、庭は全面芝生であった。こんな家があるのかと言わんばかり、塀づたいは木々が植えられていた。

さあ、みんなで遊ぼうとなった、友達といろいろ遊びを考えた、こんな場所で遊べるなんてと思い、イメージーションをかきたてられた、しかし、最初の遊びは「相撲」であった。その次はキャッチボール、なんらいつもの空き地で遊ぶのと変わらない。

しばらくすると、かっちゃんの5歳上のお兄さんがきた。お兄さんは小学校を卒業すると学習院の中学校に入学した。この界限から学習院である。自分の兄さんではないが誇らしく思った。

かっちゃんのお兄さんが大きな茶色のボールを持ってきた。革製である。持たせてもらったとにかく大きかった、重かった、1年生のちびが扱えるボールではなかった。後にバスケットボールとわかるが当時バスケットボールはマイナ

なスポーツであり知るよしもなかった。

男子はソフトボール。女子はポートボール ※興味のある方はポートボールを調べてみて下さい。

ミニバスケットは小学4年ぐらいに広まった事を記憶している。

かっちゃんの家で過ごした時間は驚きと発見、心が揺さぶられる刺激たっぷりのものであった。帰りの帰路で友達同士、思ったことを話が尽きることなく会話して帰ったことが今も鮮烈にお覚えている。

波紋のように広がる



驚きや気づきが波紋のようにひろがる。子ども達を引きつけたのはモノであり、そこで起きた出来事であり。そこにいた人(出会ったひと)でありその環境でもあった。

その後、かっちゃんの家で遊んだ経験から、落書帳に絵を描く遊びが流行ったり、バスケットボールまがいの遊びを考えだしたり、いろいろと知恵をしぼり、より楽しく遊ぶ工夫をしていた。

子どもなりに遊びにおいて表現者になっていた。感性が豊かとか、そのような次元ではなく生きているその時間を子どもなりに一生懸命生きて表現していたのだと回想する。

子ども達はみんな表現者

子どもが主体者として生活し、考え、学び育っていく、その姿に目を向け、耳を傾け、子どもの学びを支えていく、子どもの創造に寄り添うことの大切さを今この状況に置かれているからこそ大切に考えていきたい。園は様々な場面で純粋な表現ができるような環境であることに意識をもち続けたい (園長 廣部信隆)